

「神とはあってあるもの、なきてなきもの」

僕がこういう道をいただくようになったのは、30歳の12月26日から始まりました。その前から「30歳から人生が変わる」という予告があったのですが、12月26日という日に僕の霊的なお友達であり、19歳の頃から僕の頭の上に座っていたおばあさんがいなくなったことから始まりました。代わりに、50歳くらいの男性が現れたのですが、僕は11年間おばあさんとの霊的な付き合いのもとに日常を過ごしてきたものですから、代替りの男性が誰なのか気になって仕方ありませんでした。僕は先祖に対する信仰が強く両親想いで、親孝行が僕にとって一番大切なことだったものですから、その存在はきっと僕の先祖の誰かなのだらうと思っていました。だから、「ばあちゃん」と上に向かって言うかわりに、「先祖のどなたかわからない方」と声をかけていました。しかし、それに対しては何の反応もありませんでした。

僕は翌年の1月11日に北陸に行き、12日に石川県の小松というところを訪れました。昔の大谷石の石切り場なのですが、山に洞窟が沢山あるのです。そこに、仏像や色々なものが祀ってありました。そこは仏師の開いたところで、都賀田勇馬という人が仏像を彫って祀っていました。都賀田伯馬という2代目の息子さんがそこを運営していて、彼も二科展に出展するような仏師でした。その洞窟の出口のところで、2メートル30センチくらいのお釈迦様の仏像が立っているのを見た時、ピンと来たというか、ガーンと来たのです。そこから僕に超常現象が起き出しました。家に帰ったら黄金の仏様が頭の上に現れたり、人の心が観え始めたのです。その頃にじゅんじまんたちとも出会い、自分の中から湧き出る真実を疑いながらもみんなに話してこの歩みが進んでいきました。黄金の仏様に出会ってから色々なことが起きてくるのですが、9年間僕のお口先となってくれたお釈迦様のおかげで、インドに惹かれて旅もしました。そして9年間の学びをいただいた後、お釈迦様が僕を指導する役割を終えられて天上に戻られたのです。その後、今度はシャーマニズムに出会って、いよいよ神との出会いが始まりました。

シャーマニズムは山田すみ子さんと佐野いくよさんという二人の女性との出会いで始まりました。僕より12歳上が山田すみ子さんで、12歳下が佐野いくよさんであり、3人とも兎年でした。山田すみ子さんとは半年間のお付き合いがありましたが、彼女はアメノミナカヌシという神霊から守護を受けて道を説いている方でした。当時彼女はその神霊を「天主様」と呼び、小さな新興宗教を創っていました。それに対して佐野いくよさんは半分精神分裂症の状態、精神科に通いながらシャーマンの役をしている方でした。この人には色々な神々が降りられるので、一日付き合っていると赤ちゃんから幼児までまだ幼い50柱くらいの神が表現されるような、非常に面白い世界を体験させてもらっていました。しかし、その半年後、山田すみこさんが神を偽造するというようなことがありまして、この人と縁が切れました。その後、佐野いくよさんといくよさんのお母さんの艶子さんを通してシャーマニズムとの関わりが続いていくわけですが、それも半年過ぎるとだんだんうちの神様というふうに、

人間が神を所有するようになってきたのです。神も人間に使われるというようなところがあって、僕は矛盾を感じていました。時々僕も神様を困らせることはあったのですが、それは「神様から学びたい。ただ道をただただではなくて、神々に質問をしてより高い意志をいただきたい」と思っていたからでした。神も場合によっては自分の役割や位置を超えた質問を僕から受けることがあって、そうすると神様によっては僕の質問に答えられない。そうやって神様を困らせる僕でもあったわけです。しかし、僕はさにわであり、神々の中には低級霊もいるものだからそれを見分けながら、高い神には問いかけるということをしてきました。

僕は僕でそういうことをしながら、自分の中にも人としての自己矛盾を抱えながら生きていました。自分の中にエゴの部分を抱えているものですから、「神様はすべてお見通しだよな。こういった自分をどう捉えておられるのかな。もっと神からこちらをさにわしてくれればいいのに」と思っていました。さにわというのは吟味して正す、良い悪いを仕分けるということです。僕は役割として神々と出会いながら対話してきましたが、だんだんとその役割が嫌になってきました。というのも、日本には神道という流れがあるのですが、それに対してなぜ日本に仏教が来たのかというと、神道では精神を磨くということがおろそかになっているからです。特に伝統的な神道の中にそういう傾向があると思います。神社を祀っているようなところでは、道を説いて人々を霊的に高めるといふ教えがないのです。ただ儀式をしてお祓いをして終わりということであります。僕が会ったシャーマニズムの世界でも、道を究めるということはないのです。神様が現れるとそのお言葉をいただいて、神様にお仕えする。よく仕えたものには神様の名前である神格を与えられる。僕は山田すみ子さんからその一番高い神である「アメノミナカヌシの大神」の下である「ミナカヌシノオオミカミ」という名前をいただきましたが、どうもピンと来ませんでした。

そしてその1年後、都賀田伯馬さんのところに挨拶に行きました。「ここで私は霊的なことを受けて道を歩み出したのです」と伝えに行ったのです。その人は比叡山の延暦寺の元僧侶であり、法名を与える立場にいたので、僕に法名を与えると云われましたが、僕は「それには遠慮させていただきます」と答えました。「私は出家するわけでもないし、法名をもらってもそれを大事にしていくようなものでもありません」とそこでもピンと来なかったのですが、疑問に思ったのは人々が心を磨かない、学ばないということです。それどころか、神々と会うことによってしまいには神様を私物化するのです。「これはうちの神様だ」とか「うちの神様は最高だ」と人々が言い出すことに僕は疑問を持っていました。「僕の心を神々はご存知であるはずなのに、そのことについて何も問わない。なぜ神は自分のこの疑問について人間をさにわしないのか」と思っていました。しまいには、そういう人たちと付き合うのが嫌になってきて、「付き合うのをやめようかな」という気持ちも出てきました。最終的に、「自分のことを破門してくれないか」と神様に対して思っていました。

僕の態度が神様に対してだけではなくて、人間同士の信頼関係にも伝わっていると感じてき

たところで、艶子さんから「古田さん、神様が古田さんのことをあまり快く思っていられないですよ」と言われました。僕は「来た！ありがたい！」と思って、「わかりました。そういうことならば、私は今までいただいた道をこれから私なりに生きていきます。せっかくだいたご縁ですが、これをもって破門ということにさせていただきます」と申し上げました。普通だったら泣く泣く破門をされるものですが、喜んで破門をされたのを覚えています。その場を離れる時に、「やったー！これからは自由にこの道を探究出来る。僕は心を磨きたい。神々の縛りから離れて、いよいよ心磨きに専念出来るぞ！」と思った記憶があります。

当時、僕は愛知県の小牧に住んでいましたが、その頃しょっちゅう岐阜県にある自分の生まれた田舎に帰っていました。というのも、いずれ田舎に戻って、先祖代々の田畑や山を菩薩の里にしてこの道を伝えていくという計画があったのです。そして、その日もいつものように田舎に行き、実家の裏にある瀧神社の神殿で昼寝をしていました。その時は7月頃だったと思うのですが、神域の森の中で気持ち良く昼寝をさせてもらっていた覚えがあります。そうしたら、突然、「起きろ」と起こされた感覚があって起き上がりました。あたりを見渡すと、神殿の階段から手すりまでそこいら中に無数の神々がいるのです。その神々は鎧甲冑を身につけ武者姿をしているのでした。平安時代の人のような古い人たちもいれば、戦国時代の人々のような人もいて、「武蔵の神」とか「尾張の神」とか色々な神がおられたのです。僕はその神々を見た時に「何だこれは?!」と思いました。そしてその時、「こういうものたちも神であるぞ」と言われたのです。つまり、神様の世界というのはすごく広くて、大本の神を頂点にピラミッドになっていて、厄病神も貧乏神も神のうちなのです。自然を司る神から宇宙の運行を司る神、そして人間ひとりひとりもその末端にいます。「そういう広い世界が神の世界である」と言われたのです。

僕が破門された神々もその中の一角を占めています。ただ、低いところではないとは言え、残念ながら天皇家の系統の中の一部でありながらその主流から外れたところですので、今の天皇家の系列にライバル心を持っていました。ちょうど雅子様が結婚する頃、佐野いくよさんは天界では「いくひめ」と呼ばれそれなりの地位があるのに、「我々の系統のいくひめは結婚の相手が見つからないにもかかわらず、皇太子は雅子を娶る。それはいかがなものか。それに後れを取るな」ということで、「いくひめに婿を見つけて来い」というような話もあったのです。レベルが高いのか低いのかかわからないような話ですが、そうやって神様のお仕えをし、「どこそこの神社に行ってこい」とか「～してこい」という神命を受けて色々なことをやるのです。それも天界にとって重要だと言われるのですが、人間の精神を磨くことにあまりつながらないものですから、それが本当に重要なのかどうなのかと疑問に思っていました。

そこで僕が知ったのは、「神々の世界はすごく広い世界だ」ということです。それを学ぶためにこの一年があったのだと思うのです。僕は「ありがとうございます」と言い、そろそ

ろ家に帰る時間になったので神社の階段を下りていきました。昼間で天気は良く、青空には雲が広がっていました。僕は「これから神の守護というものを一切抜きにして、この道を歩んでいくぞ」と心を新たにしていました。神社の神域を抜けた時に、上がすごく気になったので上を見ました。そうしたら、またそこに誰かがいるのです。魂というか表情だけなのですが、何もものかが高い所からこちらを見ているのです。僕はそういったものに出会うと癖のように、「どなたですか？」と聞いてしまうのですが、神々は名前を持っておられるのです。さにわをする癖で、「どなたさまですか？あなたはどのようなお役の方ですか？」と失礼のないように聞いていって、内容によっては「お引き取りください」ということにもなるのです。そうしたら、何も返答がないので、「お名前は？」と再び聞きました。当時僕が破門された神様は「天心」という方だったのですが、一時期は依存関係になるくらいで、何かあると「天心様」と慕っていました。だから、「どなたさまですか？」と聞いても返答がないし、僕は神々との縁を切ったものだと思っているのにそこにいらっしゃるので、「また天心様からお言葉があるのかな」と思って、「天心様ですか？」と声をかけました。そうしたら、「我には名などない。名がなきものである」と言われたのです。「名がないということはどうやって認識したらいいのだろう？」と違ってさらに尋ねたら、「あってあるもの」と言われたのです。「あってあるものって、全然わからない」と思っていたら、「なきてなきもの。この世界のすべてである」と言われました。そして、「あってあるもの、なきてなきもの」と言われたのです。僕は全くちんぷんかんぷんで、「そういうわからない方とはどう付き合っているのかかわからない」と思っていました。しかし、それ以来現在に至るまでずっとその方とお付き合いしています。

僕がこういった色々なことをいただき心の道を歩んでいく中で、「熊野という地に自分が行かないといけない」という想いが湧いてきました。そして、色々な出会いの中から熊野の玉木神社に行った時に、そこでは国常立という神様が祀られていました。その時には特別お言葉をいただいたわけではないのですが、その次の次の日に伊勢神宮に行くことになっていました。神宮庁舎の事務長さんと会う縁があって、熊野を発ってその夜は榊原温泉に泊まり、次の日の朝には榊原温泉の駅のプラットホームで電車が来るのを待っていたのです。そうしたら、突然香りが漂ってきました。冬でしたから雪がちらちらと舞っている中で、電車が来る方向からかすかにいい香りがふわっと漂ってきたのです。「この香りは何だろう？」と思い、いつもの自分の癖で神様に聞こうと思ったら、自分の丹田から言葉が湧いて来ました。その前に、ある宗教団体のパンフレットで読んだのですが、国常立の神に目覚めるとということは、自分の内なる神、真我に目覚め、内なる声を聞くということです。後でわかったのは、国常立というのは地球神のことなのです。そして、私たちは土の子どもです。食べ物をいただいて命を生きているのですから、土の子どもです。そうすると、私たちは土の子であるということに目覚めると、この大地の神の分神であることがわかるのです。土というのは地球のことですから、つまり私たちの中に地球神がおいでになることになるのです。僕にはずっと「脱皮」という痛みが与えられていたのですが、これは国常立の神様が僕の体の中で浄化をされておられるのです。僕は内側から声が聞こえるようになってから、「天の父神、内な

る母神」と呼んでいました。内なる母神というのは地球神のことです。霊格的には国常立の神様というのは男神なのですが、そうやって、僕は天なる神様、内なる神様と使い分けていました。

それから色々なことがあって、ここ最近 1 ヶ月か 2 ヶ月のことだと思うのですが、僕の中に随分色々な変化がありました。「この世界と自分との関係、神様と自分との関係は何だろう？」と思った時に、自分を特定すれば、自分から観た何何という存在です。現象もすべてそうです。だから、あってあるものなのです。自分というものを特定すれば、自分にとって好ましきもの、好ましくないもの、受け入れやすいもの、受け入れがたいものと、すべてこの世界はあってあるものです。だから、何かを特定すればあってあるものです。この世界があると言えばあるのだし、この世界はそういう存在です。お釈迦様がすべてを超越した時に、「この世界は何にもない世界、色即是空の世界である」ということを般若心経で説かれました。しかし、それを説いたにもかかわらず、後に法華経を持って「何もないことはない。ある世界だ」と言われたのです。そして、「あるものを超えて遍満し、この世界に自分の魂と肉体が無限の微粒子となって行き渡った時に涅槃という世界に至る」と。だから、般若心経から涅槃に至ったのではなくて、法華経から涅槃の世界に行き着いたのです。般若心経は境地ですから、気持ちの中で空を感じただけのことで、あるのになという瞑想や禅は人を迷わせるのです。実際はあるのに、ないという心だけをつくるから人が迷うのです。だから、あること自体が同時に万物に通じていて自分が特定されないもの、「あってあるもの、なきてなきもの」という世界になって初めて、涅槃に至るということになるのです。

自分の立場を特定するとあってあるものなのですが、それを無限にこの世界に広げていって特定することをやめてしまうと、この世界はないに等しい世界になるのです。そういう仕組みでこの世界が成り立っています。そういう仕組みを成り立たせている大本が「あってあるもの、なきてなきもの」という存在なのです。これが神様です。だから、私たちはいつでも悩むことが出来ますが、いつでもその悩みから自分を解放出来るのです。いつでも貴いものになれますが、いつでも愚かなものにもなれますし、さらに言えば貴いなんてない世界にも行けるのです。まったく自由な世界にいるということです。

僕が僕であるということは、魂がこの体に入って生命のもとを束ねているということです。生命というのは扇を連想してもらえればわかりやすいのですが、扇はもとのところで束ねられています。そのもとの束ねがぱっと取れると、バラバラになって扇でなくなってしまいます。その扇のもとを束ねている、生命力を司る魂というのがこの中にあるから、肉体が維持されているのです。その魂をぱっと自分の肉体から切り離したら、私たちの体はたちどころに細胞分裂をやめて、自然界、この宇宙へと分裂していくのです。これは素粒子レベルの話ではありません。素粒子レベルの解体は、宇宙が再解体されて新たに創造される際に行なわれるのです。ですから、素粒子は分裂しませんが、細胞レベルで分裂していきます。それを特定して束ねている魂が中に入っている限りあり続けるのですが、それも実は瞬間瞬間細胞

は死に、新しい細胞が誕生しているのですから、自分というものは特定して止まっていることは一度もないのです。生きている限り、一瞬たりとも同じものであることがないのです。だから、私たちが「あれはこうだ、これはああだ」と何かを特定することは瞬間瞬間いくらでも出来ます。「私はこういう人です」とか、「私はあれが嫌いです」と特定し、いつでも「あってあるもの」になれるのです。しかし、それは変化し続けるものですから、実際には特定出来ないもの、「なきてなきもの」なのです。それがこの世界であって、だから私たちはいつでも悩み苦しむことも出来れば、いつでもその苦しみを取り去る事が出来るのです。それが「あってあるもの、なきてなきもの」の存在だということです。

先日読んだ本の中に、「人は悩むものである。しかし、その悩みは永久に続くものではない」と書いてあり、まったくその通りだと思いました。その時は永久に続くように思いますが、同じ悩みをずっと持ち続けることは出来ないのです。逆に、「その悩みをずっと持っていたい」と思ったら、それで続くことにもなります。つまり、悩みというのはずっと続くように思うかもしれませんが、実はその悩みすらあってないようなものですから、悩むことはないのです。先に進んだら、また違う悩みを持っているものなのですから、心配しなくていいのです。悩みすら特定出来ないものなのです。それは「あってあるもの、なきてなきもの」の解釈から出てくるものです。

では、なぜそういう存在として神様がおられるのかといえ、そうでないとこの世界は活性されないということです。悩みや問題事など色々なことがあってこの世界が活性され、そして変化し続ける。それが生命であり、喜びであり、この世界を創り出しているエネルギーそのものなのです。このエネルギーが神の存在です。僕はそろそろ神というものを物理的、科学的、法則的なものとして捉えながら、同時に宗教的な神様という対象を捉えていき、そのどれもが同時に成立する存在として見ていく必要があると思います。「私のところの神様はこういう神様で、こういう力があって、この世界のこういうものだ」という特定の捉え方ではなく、物理的にも科学的にも色々な見地から捉えてその上で神様とお付き合いしていけたらと思います。

そうすると、最終的に神様は捉えどころのないものです。私たちの人智では理解することの出来ない存在ですが、だからこそそれほど偉大なものであるのです。こうやって語っていくと、最後にはもう語りきれないというところに行きますが、過去の宗教が語っていたような「私たちの神様はこういうものだ」という時代はそろそろ終わるべきなのだと思います。神という存在が宇宙の根源としたならば、宇宙の根源というのは始まりにあってはなくて、今もその方によって束ねられているわけです。そうしたら、私たちが神という存在を特定して「あってあるもの」に封印する時代は、そろそろ終止符を打つべきだと思っています。

僕が神様に想いを向けると、僕のイメージの中では宇宙の雲が観えてきます。それは恒星が無数に集まって出来ている雲です。僕が「あってあるもの、なきてなきもの」という方を想

像すると、このイメージが湧いてくるのです。それを見ている私たちという存在は、物理的に見れば微粒子ほどにもなりません。太陽と人間を比べているようなものです。そして、その太陽が無数に集まって雲状のようになっているのです。その恒星どころか、そこでは見えない惑星の上で生きているのが私たちです。その微粒子とも言えないような存在である私たちは、想念という世界で生きています。想念の世界では、その巨大な宇宙を自分の中に特定することが出来るくらい、無限なるものになれるのです。いつもコンサートで「この星の上で」の歌の前に、地球を抱いている魂の画がスクリーンに映し出されますが、僕は地球を想うといつもあの映像が浮かびます。人間の肉体は小さくても、想念は巨大なものにもなるのです。

そうすると、人類は宗教を持つ必要があるのでしょうか。どうして今まで宗教が発展してきたのかというと、人間は悩み苦しみ、問題事を解決してほしい。そして、自分に特定の利益がほしい、「あってあるもの」の表現の片一方の側の自分にとって都合の良いものを導きたいというところで宗教が始まって、そこから神様は自分の存在を伝えようとされてきました。しかし、そういったものはもう人間にとって必要ないのではないかと思うのです。人間自身が育ってきて、全体からこの世界を捉えることが出来るようになれば、生きることも死ぬことも何も特定することはないのです。そこには苦しみもない世界です。

しかし、それはある意味つまらない世界です。悩み苦しむから、愛が生まれて喜びがあるのです。ということは、そういうことを知った上でこの世界を楽しめばいいということなのです。そうすると、特別な御利益はいらなくなります。心が高いとか低いということもいなくなるのかもしれませんが、それこそ実態を理解すれば、「あなたは真理を観たものである」というだけのことです。ひょっとしたらそれを貴いというだけのことで、それはこちらの側から観たら当たり前のことです。真理を求めている人にとったら、それを求めて得ることが出来たら、「もっと学びたい、もっと成長したい」と思うものなのではないでしょうか、それは当たり前のことをわかっていただけなのです。そうしたら、そんなことで喜ぶこともそろそろ卒業してもいいのではないのでしょうか。真理というものはもっと身近に存在しているものなのですから。

特定しないで心を向ける。「私の神様」「私の宗教」「私の教祖様」という対象を設けない。ただ、この世界がある。事実、この世界はひとつの法則によって束ねられているのです。私たちが直接関係のないような天体の運行についても、私たちを存在させる働きをしているのです。逆に、そういったはるか彼方の宇宙の存在も、私たちが存在することによって存在させているのです。そういう一体の世界なのです。そして、それがひとつとなり動いています。そのもとにある魂を神と呼ぼうが何と呼んでもいいのです。それをいくつかに分けて「私の神様」とするのをやめた時に、私たちはただすべての元の神様に心を向けることが出来るのです。それは名前もなければ、特定することも出来ません。「あってあるもの、なきてなきもの」ということです。

私たちの中に宇宙が始まってから現在まで、そして未来すべての情報が入っているのです。だから、私たちが特定しないで心に向ければ、この世界の真実が私たちの中にある無限の泉から湧いて出てくるのです。それは思い出している状態です。そういう状態になれば、私たちは無限なるものとしていつでも無限なる真理を語れることになるのです。この世界があるということは、それを束ねる存在があるということです。私たちもその一部です。だから、特定しないで心を向けることです。「あなたはどのような方ですか？名前は何か？」と尋ねるのではなく、ただ特定しないで心を向けるのです。自分たちが未熟な分だけ返事が受け取れなくて、「神様に伝わっているのかな？」と思うかもしれませんが、必ず私たちの意識は向こうに通じています。さらに当たり前のことですが、向こうとこちらの区別のない世界ですから、自分が想えば向こうは自分なのですから伝わっているに決まっているのです。特定しないで心に向ければ、私たちはいつでも「あってあるもの、なきてなきもの」になれるのです。